



特集関連 CINEMA REVIEW

ひとの縁から 映画が生まれた

江口方康監督『ご縁玉 パリから大分へ』(2008年)

土本亜理子 ノンフィクション作家



『ご縁玉 パリから大分へ』12月13日(土)～
渋谷ユーススペースにて公開

■大分シネマ5にて11月15日(土)～11月21日(金)先行上映

■佐賀シアター・シエマにて公開予定

配給：パンドラ ©IBF PARIS 2008

保健室で子どもと向き合い、退職後も“いのちの授業”をして、ときどき大人に講演する山ちゃん(山田泉さん)は声に張りがあり、乳がんになっても、転移した今だって元気に見える。が、家では素のまま。朝の台所。起きがけのボサボサ頭で大根を切りながら、「子どもは母親が泣いたり、喚いたり、ものすごく死に対して恐怖に思っているとか、これからの治療をすごく不安に思っているとか言う相手じゃない。やっぱり子どもは守る相手や」……。映画『ご縁玉』の冒頭に本音を口にするシーンが出てくる。

その「母親」が涙した。横になる山ちゃん。お腹に置かれたチェロから低い音が響く。フランスからやってきたチェリスト、エリックマリア・クテュリエ氏、彼のチョロを聞いている間だけ涙腺を開けることができた。海の波を思い起こさせる懐深い音が、バッハの無伴奏組曲をはじめとしたチェロの音色が、全編やさしく、時に力強く覆うこの映画は、山ちゃんとエリックマリア氏の出会いの物語だ。

がん転移後に旅したパリで彼のチェロを聞く。ベトナム戦争の孤児でフランス人夫婦に引き取られ、パリ国立高等音楽院に首席で入学、最高評価を得る音楽家に育った彼だが、自分は何者かを探している。同じ乳がんを患った養母に何もしてあげられなかった。その無念が山ちゃんへのチェロ・セラピーになった。山ちゃんは日本に來た彼を仲良しの児童養護施設に連れて行く。そこには「かつての」エリックマリアがいた。初めて聞くチェロの音に惹きつけられる子どもたち。凝視する目。頭を抱え込む少年……。彼らに音魂が宿った瞬間、弾き手にも何かが訪れた。そうした無数の出会いに満ちた映像に、大分のなだらかな山々の壮観が重なる。静謐ながら圧倒的な存在感で迫るこの物語を、誰かに見せたい。縁を結びたい。今、全国上映に向けて、そんな思いに突き動かされた観客たちが動き出している。

＊江口監督(在パリ)の初長編映画でもある本作品。

「ひょっとして私が山ちゃんの『いのちの授業』の素直な生徒だったんじゃないか」と語る江口さん。来日時、監督の真意をインタビューした。詳しくは山ちゃんの公式ブログで。
<http://yamachan.biz/100/09081149.html>